

バフチン読解への新たな観点

田島充士編著

『ダイアログのことばとモノログのことば』

ヤクビンスキー論から読み解くバフチンの対話理論

福村出版 二〇一九年四月

田島充士さん(以下田島とする)の労作を拝読して、学ぶことが多かった。言葉を通しての人と人の理解に関わる根本的課題が扱われていて、この書物は、心理学の実践的な領域においても大いに関係する。著者渾身の探求の賜物である。様々な観点から読み解かれるべき労作である。その正当な評価は、言語学、文学、社会学などの立場からも、多くなされるべきであろう。それを待ちたい。

評者は心理学とくに、カウンセリング心理学を専攻する。このたび浅学を省みず書評をお受けしたのは、労の多い周到な資料検討という作業を通じてなされた画期的な著作について、同業者たちにも知っていただくための先鞭を切りたく考えたからである。しかしながら心理支援や心理療法の領域に引き寄せられて論じることしか、評者にはできない相談である。評者自らの「視覚の唯一性」に依拠しながら、トピックを抽出し、編著者の論述に沿って、評者の側の「視覚の余剰」部分を切り捨てることなく敷衍するような論評とする。我田引水的な書評になることをご容赦いただきたい。

ダイアログがなぜ話題なのか

労作の卓越した点についてまず三点あげておく。

一 ヤクビンスキーの一九二三年論文の原著にあたり、ダイアログのことばとモノログのことばを、具体的なコミュニケーション状況の中で明確に位置づけたこと。(田島はロシア語原典を忠実に反映したドイツ語訳より邦訳し、原典には監訳者である桑野隆さんと共訳者である朝妻恵里子さんがあった。)

二 ヤクビンスキーがロシア・フォルマリズム運動の一翼を担う言語学者の一員であったことをもとに、異化作用の観点を導入することによって、言語使用の自動化に抗する他者性の意味を明確にしたこと。

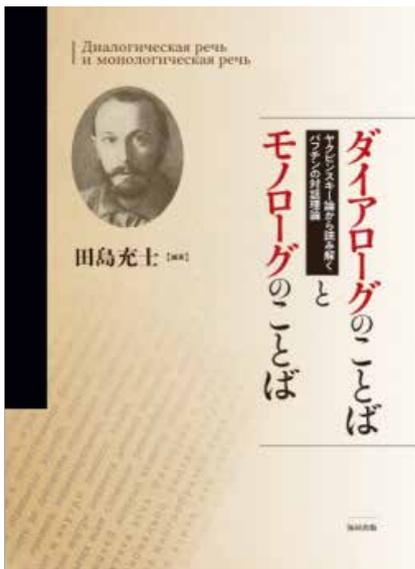
三 バフチンの主要概念をヤクビンスキーの理論と対比照合することを通じ、バフチンのダイアログ・モノログ概念をはじめとして、ポリフォニー、ラズノレーチェ(ヘテログロシア)、ソグラシエ、笑いなど難解とされる概念を明確にし、実践的にも有用なものとして磨き上げたこと。

以上によって、心理学やその実践領域として、教育心理学や臨床心理学でダイアログという概念がなぜ話題なのか。そしてそれがどのように導入されるべきなのか、その方向性が明確に示されたことをあげておきたい。

心理社会支援で、昨今話題を集めているオープンダイアログの実践において、バフチンの対話理論との出会いは大きかったようである。オープンダイアログとは、フィンランド西ラップランド、ケロプダス病院で展開した急性期の統合失調症

への薬物療法に頼らない新しい治療法で、目覚ましい効果を上げていることで評判になっている。発症時二十四時間以内に専門家チームが訪問し、状態が回復するまで患者家族ともに対話を重ねるものであるが、その理論的主導者セイックラ (Seikkula) は、自分たちが試みてきた医療実践は、バフチンが文学を題材にして理論化した対話そのもの、「バフチンが書いていることを実践でそのまま、クライエントにしている」と述べている (Seikkula, J. (2011). "Becoming Dialogical: Psychotherapy or a Way of Life?" *The Australian and New Zealand Journal of Family Therapy*, 32-33, 179-193.)。

すべての発話は応答を求めている。人の言葉はそれをどのようにに聴き受け取るかということとセットになっていて、話すことと聞くことは切り離せない。人の言葉はポリフォニー、多声性がその特徴である。一つの言葉に多くの声と同時に響いている。バフチンの言語観を通じて、支援の場で今、発せられているすべての声をそのまま受け取り、身体ぐるみでその場で応答



する、このような言葉の活動そのものが、対人支援に関わる実践において深い意味が与えられる。

しかしながら心理学領域では、うっかりするとダイアローグを上位の豊かな言語形式とし、モノロー

グは貧しく、否定的なものとして下位におくような優劣感がつきまとう。バフチンの著書に戻り、ダイアローグとモノローグの概念を見極める地道な作業がこのあたりで必要である。そういう意味でも、田島の労作は時期を得た待望のものと評価したい。

ヤクビンスキーのモデル

ヤクビンスキー。心理学領域ではまず人口に膾炙しない。バフチンの影に隠れてしまっている。ヤクビンスキーは無論のこと、バフチンの名前も、ヴィゴツキー心理学のルネサンスに重なるように紹介されるが、心理学系の場合、一次資料に当たり根拠資料を確かめそこから、ダイアローグの真意を定位置ようとする作業はまれであろう。それだけでも本書において達成された事項は、国際的にも評価される労作である。

評者もヤクビンスキーの名前はバフチンとその周辺を探る段階で名前は知っていた。一九二三年の『ダイアローグのことばについて』の英訳は、どこかでプリントしたものにざっと目を通したことはあるが、あまり印象に残っていない。言語コミュニケーション論の立場からのダイアローグとモノローグを整理した論文のように思った。田島の編著で、その誤解が解消された。

田島によるヤクビンスキー理論の詳細な検討からわかるが、ダイアローグのことばとモノローグのことばに優劣関係はない。コミュニケーションが直接的か間接的か、相互的か一方通

行的かという形式の違いが両者にあることをもとに、ヤクビンスキーは日常的に用いられる言葉の形式モデルを提示する。直接的ダイアローグ、間接的ダイアローグ、直接的モノローグ、間接的モノローグの四つに分類する。そして、コミュニケーションの場における空間的なリソースと知識的リソースの共有量によつて、以上の四つの形式の特徴が明示される。なお本論で紹介する空間的リソース・知識的リソースは、田島がヤクビンスキーの議論を分析する中で創出した概念である。

具体的参照物が意味交換のリソースとして認知できて、相手の意図などが身振り、表情、発話のイントネーションなどによつて直接とらえられる状況すなわち、直接的ダイアローグでは、聞き手が視覚、聴覚などの感覚器官によつて直接的に認識できる内容(空間的リソース)について、わざわざ言葉にする必要はない。間接的ダイアローグでは、空間的リソースが限定されるため、言語媒体そのものに依拠する比率が高くなる。メールでのやり取りなどが、ときおり攻撃的にとらえられがちなのは、状況を把握する空間的リソースが少ないためである。

会話のテーマに関わつて、聞き手に比較的安定した記憶があり、発話内容の理解に文脈を与え、解釈に一定の方向性を与える聞き手の側のリソースを、ヤクビンスキーは知識的リソースとする。聞き手、聴衆との間で知識的リソースに落差がある場合、たとえば大学の講義などが想定されるが、直接的モノローグという形式が優位になる。「モノローグ」というと上から下への一方通行という否定的印象が付着しがちであるが、そこでキャッチできる空間的・知識的リソースは、実は豊かなものである。

米国の精神科医サリヴァン(Sullivan, H.S.)は、いち早く精神医学にコミュニケーション論を導入し、その視点から精神医学と治療面接を再構築した人として知られ、『精神医学はコミュニケーション論である』という講義録も残している。ヴィゴツキーの『思考と言語』を一九三〇年代に注目し、英語への抄訳を試みた先駆的な人である。その講義をのぞいてみよう。講義の始まりでサリヴァンは、次のように述べる。

「皆さんに注目しておいていただきたいのは、当面の音声コミュニケーション過程のもつ複雑なパターンのことです。音声といつても音を発することと、音を受け取ることとがあり、過去の音声の記憶と未来の音声の予想とがあり、言語的なものとの瞬間、効果的に働いているか、部分的には無効であるか、全然だめであるかということとをちよつと考えてみていただきたい」言葉が発しているその現在において、言葉が教室と聴講者たちを含む環境のなかでどのような効果を生むのかについて、サリヴァンは講義の場で、聞き手に注意を促している。

「あと、現在を構成する座標軸としては他にただ、私の内臓筋および骨格筋の状態をあげるだけにとどめたいと思います。これらの筋の状態は、現在の場に私がどの程度満足しどの程度不満であるか、今日のこの講義のすでにすませた部分とこれらの部分とに私がどの程度満足し、どの程度不満であるか、また、この連続講義のうちすでに済ませた回の講義、これから予定している回の講義について、さらには今日の講義の前後の事柄について、私がどの程度満足し、どの程度不満であるか、など関係しています。」(Sullivan, H.S. (1953). *Conceptions of Modern*

Psychiatry. New York: Norton. 中井久夫・山口隆訳 (一九七六) 『現代精神医学の概念』みすず書房 一二八—一二九頁)

講義という行為とその状況が講義の意味内容を支える部分をあえて、言葉にすればこのような試みになる。講義で一つの内容を講じようとする瞬間に動き出す空間的、知識的リソースは膨大で豊かなものである。

言語の構成と言語量の変化に注目することによるヤクビンスキーのモデルは明晰である。どのコミュニケーション形式が優れているという問題ではない。さすがにフォルマリズムである。どれかの形式に肩入れせずに、各コミュニケーションを柔軟に使用して組み合わせれば、言語活動の新たな可能性が広がる。

心理カウンセリングの場面をヤクビンスキーのモデルでとらえたとき、面白いことがわかる。カウンセリングは直接的ダイアログに見えるが、知識的リソースが未共有である。カウンセラーは相手のことを知ろうとするが、既存の知識リソースで相手を理解することをいったん置いておく。カウンセラーは手掛かりを今ここでの空間的リソースに求め焦点を当てる。話を聞きながら動き出す自らの感情の変化、身体感覚の変化を感じ、それらを手掛かりとして積極的に話者であるクライエントの状態の理解に活かそうとする。このようなカウンセリング会話の特徴が、浮き彫りになる。

統覚量について

目からうろことも思える収穫は、ヤクビンスキー論文において基本的に扱われている「統覚量」の考えである(三九頁以下ページ数のみ表示)。統覚という概念自体、現代心理学では使われることはなくなつた用語であるが、この論文から、人と人が関わり、やり取りする場面の理解に役立つ可能性のある概念として、甦らせることができよう。また、バフチン読解にあらたな観点をもたらすであろう。

ヤクビンスキーは統覚という言葉をもとに、言語理解を説明している。つまり統覚量が互いに共通する相手とは言語的な使用は少なく済む。統覚量が互いに近接する場合、相手の話と同じことを聞き手が考えているということが生じる。それに落差がある場合、「統覚量の共通性という主観的表象を、コミュニケーションを通しそのつど確認・更新」することが生じている(九七)。

言い換えると、なれ合い関係が生じやすい相手とは、時々互いの統覚量の差異に注目するとよいだろう。それによつてその関係が変化を起こし、新たな関係を再構築するきっかけになるかもしれない。心理支援、カウンセリングの場では、この落差こそが支援の目標として意味を持つ。学校教育場面でもそうであろう。

サリヴァンの雄弁な講義をふりかえってみると、サリヴァンは自分の欲求の充足と不満、それにとまなう筋感覚の変化にも注意を払っている。今この瞬間に、語り手は記憶をたどり、かつての類似の場面を想起し、今ここにいる環境場での応答や自己の生体内部での筋肉感覚の変化などを同時に感受している。しかもバラバラではなく、あるパターンとして受け取っている。

る。田島のいう空間的リソースと知識記憶のリソースのまともを、統覚量と呼ぶことができよう。

またフロイトの古典精神分析では、患者に寝椅子を使用し、分析家はその後ろに座して、主に自由連想を導入する。極めて特殊な言語交流状況を設定する。この仕掛けでは、日常の自動化した言語使用は遮断され、分析家と患者双方が利用できる空間的リソースや知識的リソースはきわめて限定される。統覚量をあえて制限することによって、発話の一つ一つが比重を増し、まさに統覚量の共通性という主観的表象を、コミュニケーションを通してそのつど確認・更新する作業に、分析家は患者と同行するのである。

統覚というと、哲学ではライプニッツやカント、心理学ではウイリアム・ジェイムズをルーツとするが、臨床心理学領域で真っ先に思い浮かべられるのは、TAT (Thematic Apperception Test) という投影検査法である。この心理テストは、かつて「主題統覚検査」と訳されたように、統覚という言葉が入っている。TATでは、二十枚の刺激図版となる絵が用意され、検査対象者は一枚一枚それぞれの絵をもとに、過去、現在、未来を含む物語を語ってもらう。「今どういう状況で、これまで何があつて、これからどうなるかということをも一つの簡単なお話にして話してください」という指示に従って、物語を作成する課題である。この方法の創始者マレイ (Murray, H.) の後を継ぎ、TAT研究を展開したベラク (Bellak, L.) は統覚を、「知覚したものについての生命体の意味ある解釈」ととらえている。この解釈に影響を与えるのは、個人が体験してきた記憶の蓄積である (Bellak, L. (1954). *The Thematic Apperception Test and the Children's*

Apperception Test in Clinical Use. New York: Grune & Stratton.)。

人は生命体として、外部から多様な刺激を被っている。それらの内、感覚器官によって受け取った素材は、それだけでは受容者にとって意味あるものとはならない。一瞬覚えてはいても、ほとんどは記憶に残らず消えてしまう。感覚知覚素材を私たちは意味あるものに編成している。今ここで人が感覚を通して受け取っているものは、すでに、個人の過去の体験の残留物によって同化され、変形を受ける。新奇なものも体験の中に位置取りを得ることによって、まとめられる。統覚とはこのような働きである。他者との統覚量の共有や微調整が互いの自己を再構成することにもつながる。

視覚の余剰

ヤクビンスキー論文を正当に踏まえたうえで、バフチンを読解することが、この労作の柱である。本書第II部の記述内容は豊かで、バフチン研究として最前線のものに見受けられる。

ひとまず二つの点に注目してみよう。一つは、統覚量という観点から、対話者たちの視覚の余剰というバフチン対話理論の前提となる点を明確にしたこと。もう一つは異化作用という観点によって、ラズノレーチェ (ヘテログロシア) というバフチン固有の困難な概念について、それがもつ言語理解に関わるインパクトを正当に扱うことが可能となったことについてである。私と他者との間には、視覚の余剰という根本課題が潜んでいる。ダイアログ論の前提として、空間的に共有できない、自

己の視点の唯一性を話者と聞き手は持ち、それぞれの視点で世界の意味を解釈する。実際に体験される私と彼の具体的な視野は一致しない。「私たちが互いに向き合うとき、私たちの瞳には二つの異なる世界が映っている」。バフチンはこれを「視覚の余剰」或いは過剰と呼ぶ。発話された言葉の背景にある余剰と、話者の視点の唯一性によって、発話の状況において他者との分かり合えなさがつねにつきまとうことに、田島は注目する(二五四)。

ダイアローグは、他者との間で必ず視覚の余剰というゾーンをそのつど産出している。他者との間で生じる余剰ゾーンを切り離さず、他者の異質性を損なわず、応答を重ねることが、ダイアローグの核となる。ダイアローグとは、けっして乗り越えられない他者性の壁に直面しつつ、応答を維持することである。視覚の余剰はヤクビンスキーの統覚量の概念と重なる観点である。バフチンも統覚的背景という形で、統覚を運用する(二五八)。聞き手と話し手の統覚量は完全に一致することは期待できない。話者は聞き手との間にある対象の解釈そのものだけでなく、聞き手の統覚的背景の内実を察しながら、言葉を発する。聞き手の応答可能性を測りながら、話者の側にはたえず内的なダイアローグが動いている。

異化作用

ヤクビンスキーはシクロフスキー、エイヘンバウムらとともに、オポヤーズ(詩的言語研究会)のサークルを形成してい

た。フォルマリズム運動のもとになるサークルである。ロシア・フォルマリズムについて日本でも、一九六〇年代から七〇年代にかけて、文学や演劇畑でとくに、異化という概念がもてはやされたような記憶がある。田島の論は、フォルマリズムの異化概念を、言語使用の習慣的自動化に抗する観点を提供するものとしてダイアローグ論につなぐ。それによって、バフチンのダイアローグ論理解の奥行きが見通しの良いものになった。

自動化に流れるやりとりに対して、聞き手である他者の応答が異化作用を生じる。それがコミュニケーションに創造的なショックを与えることになる。言葉が制度の中で固定した働きを取ってきた既存の意味作用が無効にされる。言葉の自動的な交流を前提にして他者に近づいたとき、他者の抵抗、否定的な価値づけが向けられる。そのときの戸惑いは、話者にとって自分が使っている言葉に意識的になる契機になる。他者への応答可能性に開かれるように、話し手が変化を受け入れる。ここにダイアローグが始まる。

個々の話者の「異化」を伴う異言語交流、異種言語混交と訳されること多いラズノレーチェ(ヘテログロシア)という概念も、異化作用から読み取ることによって、その真意が実践的に位置づけられる。バフチンは、異質な他者の世界の視点により、慣習化された世界の意味が再発見されることを「異化」と呼ぶ(一七四)。

とくに、バフチンが扱うカーニバル文学論は異化との関係で重要である。『フランソワ・ラブレールの作品と中世——ルネッサンスの民衆文化』をはじめとするバフチンのカーニバル文学への著作類は、心理学、対人援助などの領域からは読解しにく

い部分であった。田島の分析を通して、実践的な意味も含めて新たな位置づけを試みる事が可能になる。

バフチンのダイアローグは、聞き手の笑いと怒りを含みつつ進行するダイナミックなものとなる。その際に話者は「自身の言語認識の自動化を停止し、聞き手の視点から発話を構成する複雑な意志行為を操作せざるを得なくなる」(二〇四)。このプロセスにおいて話者の側にも笑いが発生する。「笑い」の作用は、慣習化された世界観に基づく期待が裏切られ、思ってもみなかった状況が展開する際に発生する。話者に怒りを引き起こすこともあるが、自分の言葉について、他者による新たな解釈の可能性に驚き、楽しむこともできる。このように、笑いはアンビバレントな異化作用である。聞き手の笑いを受けて、「話し手は自らの意識自身の言語認識の自動化を停止し、聞き手の視点から発話を構成し直す」という複雑な意志行為を操作せざるを得なくなる」(二〇五)。

言い換えると、自分が相手によって変えられるということに、私が開かれていることが、ダイアローグを導く。一方で、聞き手の笑いや怒りを無視、軽視し、その抵抗を感じることもなく発話を続けると、見かけは言語的やり取りをしているようでも、モノローグである。

以上の観点を借りカウンセリングの対話応答関係をみると、ダイアローグを導く他者の応答の異化作用に沿うのが、カウンセラーの基本姿勢ではないか。互いの応答は前もっての予測はつかない。自分の発話に対して、相手がどのように返してくるか、不確定である。未知である。ダイアローグではその不確定さに耐え、むしろ相手から予想外の応答があることに関心を

示すゆとりが求められる。ポリフォニー

ポリフォニーやソグラシエというバフチン独自の言葉の位置づけも、田島の周到な検討から、明確になった。

心理学領域でも、オランダの心理学者ハーマンス(Hermans, H.J.M.)らは、「対話的自己論」(Dialogical Self Theory)という立場をとり、自己の実体性・単一性という近代的観点を批判し、自己の複数性と、文脈的に構成されるという観点を活かす理論化を推進している。自己は複数の声をたえず産出する。他者の言葉も、そこに反映される。実践場面では、その場のすべての参加者の言葉を集め、その言葉も活かして応答を重ねる。このような声の複数性が共鳴し合う自己のとなえや対話実践で、ポリフォニー (polyphony) という言葉が使われてきた。田島のバフチン読解は、調和的印象に流れがちな心理学文脈のポリフォニー理解とは、一線を画す。ポリフォニーとは、作者と登場人物そして読者が「互いに異質な視点から、それぞれのイデオロギーに対して、否定的な評価を下し合う矛盾に満ちたダイアローグ状況を示す」(二三〇)ものである。

ソグラシエという言葉にも注目したい。この言葉は、英語訳の agreement に引きずられて、少なくとも心理学領域では、意味があいまいなまま保留される形になっていったが、「ソ(ともに)」、「グラシエ(声を出すこと)」をかけあわせたバフチンが提唱するソグラシエ (soglasie)、すなわち「ともに声をだすこと」協働「さまざまな声があること」差異対立の両立という概念は、心理社会的支援で話題となっている協働 (collaboration)

を導くうえで重要である。支援の場において、「個々の話者が、独自の評価をもつ視点の異質さを失わず、しかし同時に、同じ活動に携わり続ける」という観点がそこから与えられる。

ダイアログとモノローグ

ヤクビンスキーとバフチンのダイアログ概念は異なる。これが労作の結論の一つである。ヤクビンスキーの場合ダイアログとは、話題に関する空間的・知識的リソースの共有への期待を前提に、話し手と聞き手が比較的速度やかに交替することを念頭においたコミュニケーションの一形態であるのに対し、バフチンの場合、話し手と聞き手の交替頻度や発話の構成形態とは基本的に関わりなく、相手の応答および応答可能性へ志向し、自分自身の発話を調整していくことで展開し続ける話者らの内的・外的な相互交流を示す概念である(一六一)。

ところが、バフチンのダイアログとモノローグの概念が、ヤクビンスキーのそれらとは異なるにもかかわらず、バフチンのテキストに、ヤクビンスキー的なダイアログとモノローグの概念が混在している。田島のこの指摘はきわめて重要である。バフチンの定義にもとづくダイアログとモノローグの概念をそれぞれ、ポリフォニー・ダイアログとホモフォニー・モノローグとするべきではないかという提案は、対話・ダイアログという概念が拡張、拡散している心理学、人間科学の実践領域において、説得力を持つ。

実践領域への適用

バフチンがなぜ心理学の実践領域に重きを置かれるのかは、田島のこの画期的な仕事からおのずと理解できる。まず田島が整理し、示したヤクビンスキーの言語形式のモデルは、日常文脈で習慣化された言語使用、定番の序列関係や、価値観に基づく文脈でのやり取りに飲まれることなく、コミュニケーションの形式から言語の理解をとらえる。これは現代においても斬新でわかりやすい。たとえば条件反射学とその後の展開、信号系理論として、一九五〇年から六〇年代にかけて、日本でも導入されてはきたが、ほどなく歴史的な位置づけにとどまってしまった理論なども、フォルマリズムの視点を取ると、その構造が見え、新たな読解が可能になるのではないか。

心理援助職の私たちは、ローカルな今この現場とその相手に関わって、それぞれの固有の言葉とその働きを学ぶことや、話者自身が自らの言葉の複数性に気づき、それぞれの言葉の交流を自身の中で実行することに自覚的でありたい。臨床実践、心理支援場面はつねに名前をもつ特定の相手とのダイアログである。不特定多数の相手との間にダイアログは生じない。ダイアログは標準的、平均的な人間が相手ではない。言い換えるとダイアログにはシナリオはない。ダイアログはつねに新しい。そして驚きの瞬間が含まれる。

最終的にはダイアログの限界に関わる議論がなされなければならぬだろう。ダイアログのある瞬間に壁にぶつかると。臨床の場でたとえば、自分を閉じたままの人に対して、ダイアログが可能だろうか。そして他者性とは、この限界にお

いて現れてくるものである。心理支援の場面において、この限界は避けて通れぬものである。相手を助けようとする意志そのものが限界によって打ち砕かれる。人に会うときは、そのような意志や欲望を捨てることであろう。その状態に踏みとどまることが、ダイアローグの実践的態度である。回復や治癒はダイアローグのあとに、かろうじて生じるかもしれない副産物ともいえる。

(立命館大学・森岡正芳)